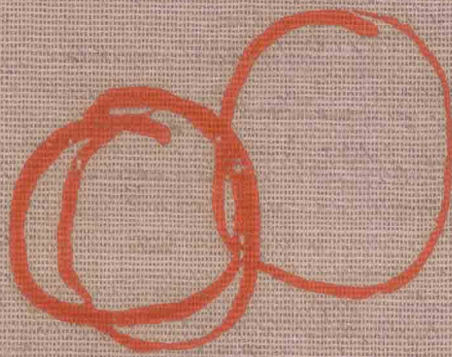




高見順全集

第五卷

勁草書房刊

高見順全集 第五卷

昭和四十八年八月十日印刷
昭和四十八年八月二十日發行

著 者 高 見 順

發行者 井村壽二

印刷者 山 田 博

發行所 勁草書房

東京都文京區後樂二―二三―一五
電話東京八一四(六八六)
振替東京一七五二五三
◎高見順一九七三
(〇三九三―八三三・五〇〇―一八三六)

*本書の定價は外函に表示してあります。

高見順全集
第五卷

編纂委員

川端康成

伊藤整

澁川 曉

平野 謙

中村眞一郎

小田切進

目次

都に夜のある如く

7

生命の樹

193

解説 平野 謙
解題

391 377

都に夜のある如く

都に雨の降る如く

わが心にも涙ふる

心の底ににじみいる

この忙しさは何ならむ

ヴェルレーヌ

鈴木信太郎譯

都に夜のある如く

わが心にも夜がある

夜のしじまに忍びくる

このときめきは何ならむ

又氏即興吟

第一話 感じのある娘

一

「女をだますのは、簡単なのだが、だましたあとの始末が、簡単にいかない」

「お互ひに、それで、困る」

「困ると思ふから、だませない」

「君は、しかし、大分だましたらう」

「大分は、ひどいが、若い時分は、だますつもりでなく、だましてゐた」

「若い時分は、それですむんだが、今は、それではすまない」

「だから、うつかり、女がだませない」

「と言つて、女を諦める氣持にもなれないのだから、困つたものだ」

中年男が二人、いたつて不謹慎な會話をしてゐる。赤の信號が青に變るのを待つて、二人は鋪道にたたずんでゐる。一人は背が高いかはりに瘠せてあて、他の一人は背の低いかはりに肥つてゐる。後者が、何か思ひついた顔で言つた。

「あとになつて困らないやうに、あらかじめ、ちゃんと手を打つておいて女をだます——これが、つまり女をだますといふことなのかもしれない」

「あとで困るやうでは、だますにならない？　なるほど。

——具體的に言ふと、その手は？」

「知つてたら、とつくに、女をだましてゐる」

「たしかに、しかし、さういふ手は、あるね」

信號が青に變つたので、廣いその昭和通りを、銀座へ向けて渡らうとすると、二人の横で等しく青の出るのを待つてゐた自動車が、一齊に飛び出して——二人に並行して進むのではなく、二人の方へといきなり曲つてくる。

車道に出た二人は、横合ひからくる自動車にまごまごすると轢き殺されさうなので、また鋪道に戻つた。横斷しようとする人間は二人だけなので、横斷者の多い銀座通りなどと違つて、自動車の方は遠慮のない走り方だ。さうして、その自動車の数がまた物凄く、大半はトラックのそれが、いづれも銀座の方へと直線的に進行しないで、汐留、新橋の方へと曲つて行く。何列にも薙めくやうにして曲つて行くのだが、のこらず通り切らないうちに信號は赤に成る。

「困つたね。沖津君。これでは、いつまで待つても、通れやしない」

肥つたのが、無然として言つた。

「こは、いつもこれなんだ。全く困つたもんだ」

沖津と呼ばれた瘦せた方が、このあたりの住居者のやうな口振りで、

「向うへ越すのが、まるで、いのちがけた」

このあたりの人たちは、ここを「銀座の親知らず」と名づけてゐる。

「越せないとなると、越したいが」

「女の場合と同様か。玉置君」

「女を越せない俺たちが、こんなことで力んでゐる」

「演舞場の方へ抜けて、ぶらぶら、遠廻りして行くか」

と沖津が——沖津とはこの私のことなのだが、うしろを振り返つて言つた。二人とも、銀座へ出るのに、何もさう急がなくてはならない身ではなかつた。それだけにまた悠長に、玉置はそこにまだとどまつて、いかつい圖體をしたトラックの人もなげな横行を見ながら、

「女に對しても遠廻り主義といふところかな、俺たちは」

「遠廻りだけして、結局、行きつかない……？」

「中途で、やめてしまふ。バーなんかで、これはと眼を惹かれる女があつても、惚れて通つてゐるうちに——十回も會ふと、もう、できてしまつたあとのやうな氣がしてきて、すーッと熱がさめてしまふ。三四回頃に、できてしまはないと、駄目なもんだね」

さう言つて玉置は、熱のさめた女から佻しく去つて行くみたいな背を、その十字路に向けた。

そこは、市場通りと昭和通りとが相結ぶ口に當つてゐたら、自動車の往來は大變なのだつた。昭和通りの殆んど外れ、或は、はじまつたばかりと言ふか、その昭和通りから別れて、市場通りがはじまるところである。

銀座の方から言ふと、銀座七丁目の、資生堂のあの十字路、あれから東銀座に入つて、昭和通りと交差する地點が、これである。昭和通りを越して更に真すぐ行くと、その突き當りに、東京中央卸賣市場がある。

その道を、十字路から少し行つた左側のガレーヂから、去年の丁度大晦日のことだが、火を出した。私たちは、今その焼け跡の前を通つてゐる。それで私は思ひ出したのだが、その火事的时候は、日頃の物凄い自動車の往來もびたりとまつて、さしもの難所の十字路も實に悠然と横斷できたものだつた。火事騒ぎに、悠然もないものだが、かねて怨み重なる憎たらしい自動車が、そのときばかりは横行がかなはず、まことに痛快至極だつた。火事場へと實際は馳け足の横斷も、その痛快感から心理的には實に悠然といふのに他ならなかつた。人間も自動車も平等に通行していい筈の道路といふものを、わがもの顔に横行してゐる自動車から、初めて人間がその道路を奪回し得た——そんな感じでもあつた。十字路に、

消防のホースが縦横に敷かれたために、自動車の交通が遮斷されたのである。といふことは、すなはち、消防自動車——自動車のおかげといふことに成るのは口惜しいが、しかし、そのときはたしかに、痛快感があつた。

「いい氣味だつた——と、その後、新橋で飲んだとき、つい、うつかり、それだけ言つたもんだ。すると、おにいさん、ひどいことをと、若い妓にやられた」

いい齡をして子供っぽい痛快感だと、私はそれにも苦笑しながら玉置に言つた。そのとき、私のゐたお茶屋は、今はトラククの疾驅してゐる道路をへだてた向ひ側の横丁にある。新橋演舞場の方へ抜けると、その三つの横丁に新橋藝者の一流の、所謂お出先が、かたまつてゐる。

若い妓から叱られて私は、

「自動車のことを言つたんだ。大晦日に焼け出された人は、ほんとに氣の毒だ」

ガレーヂの隣りは蕎麥屋だつたが、年越し蕎麥で大童のところを火事では大變だつたらう。

「ホースの水で、お姐さんたちの出の着物が、みんな水びたしになつちやつたんですよ」

と若い妓は言つた。火事場の裏には、置屋があつた。

火事は晝間のことだつたが、その夜、置屋のある路地を私が通りかかると、人力車を降りた火事見舞の女に、置屋の者

が、

「……ありがたうございます」

と言つてゐるのが、私の耳に入つた。狭い路地の、ごつた返しかえりのその家の前へ、人力車で乗りつけた女は、お出先の女將おでしらしい恰幅かちだつた。類焼を免かれたことが、二人の會話に出てゐたのだらうが、

「ありがたうございます」だけ聞いた私は、瞬間、奇異の感を與へられた。

「いい氣味だつた」だけでは、これも人に奇異の感を與へずにはおかぬ。若い妓にやられるのは當然だつた。伊藤博文が藝妓にやりこめられた結果、朝鮮統監に成つたといふ話は、今も新橋に傳はる有名な話だが、私は藝妓に叱られても、別に何のことは無い、ただ叱られつ放しである。

二

博文の挿話が今もつて新橋の自慢話として傳はつてゐるのは、昔も今も變らぬこの花街の性格といふものを示してゐるやうである。朝鮮を併合した日本の、そのときの總理大臣は桂太郎だつたが、初代の統監を誰にきめるかについて腐心した結果、酒盃の間にきめようと、山縣、伊藤、大山、井上、松方の諸元老を築地の瓢家ひょうかに招いた。新橋のえり抜きえりぬきの藝者

が、その席に待つた。桂は伊藤を統監に推す肚だつたが、かねて伊藤びいきと言はれてゐる手前、自分からさうと口が切れない。座が白けて、藝者たちも取りなしやうがない。藝者のひとりの松田中の秀松が、伊藤の前で、膝に眼をおとしてゐた。すると、伊藤が、

「こら、秀松、居眠りする奴があるか」

「御前さま達が、むつつり黙つていらつしやるから、眠くもなるぢやありませんか」

と秀松は、やり返して、

「何がそんなに、難かしいんでございます」

「朝鮮へ行く親方をきめるのだから、難かしい」

「そんなこと、なんでもないぢやありませんか」

怒鳴られた腹いせに秀松は、伊藤をやりこめた。

「御前が、自分でいらつしやれば、いいぢやありませんか」

行きがかりで、つい、さう言つたのだが、その結果は、

「さうだ。伊藤さんが行くがいい」

この井上につづいて口々に、

「秀松の指名だ」

「さ、きまつた、きまつた」

——かういつたことは、今も昔も變らず傳統的に、ここで行はれてゐるやうだ。

私はさきに、新橋で飲んだと書いたが、それは、友人の、

のさる會社の重役に招かれてのことであつて、自腹を切つての遊びではない。もつとも友人も自腹を切つた譯ではないが、自腹を切らずに遊べる方法といふものに恵まれない私は、ひとから招かれたとき以外に、ここで遊んだことはない。玉置も——いや、玉置の方は、その氣さへあれば遊べる身分なのだが、藝者遊びは嫌ひなのだつた。だから、その玉置と私とが、女をだますのどうのといった穩かならぬことを、冗談の口調でない故に一層穩かでなく言つてゐた、その對象の女からは、自然、ここの藝者たちは除かれるのである。そのせゐもあつてか、新橋演舞場の屋根を横眼で見ながら、

「あつちに曲らないで、真すぐ行つてみようか」

と玉置は言つた。料亭の立ち並ぶ道を通して、向うに演舞場の柿色の煉瓦が見える。煙突から黒煙があがつてゐるのは、スチーム用の石炭をたいてゐるのだらう。

夜は高級車で充滿するその道も、晝さがりのこの時刻では、まだ一臺もその姿は無い。

立ち並ぶ料亭の裏は堀割だつた。その堀割にかかつた橋の右側を、市場へ向けて渡りかけて玉置は、ふと、立ちどまつた。

欄干の土臺石に、ペンキで「仕切場」と書いて、矢印がある、それに玉置は眼をとめたのだ。矢印の方を見ると、川岸へさがつた下に、あらゆる種類の屑が山をなしてゐて、ルン

ペン風の人々が、そのなかで、鈍い動きを見せてゐる。

橋際に黒い倉庫風の家があるのを何氣なく見て過ぎたが、私たちは改めて振り返つた。入口は他らしく、一面にトタン板が貼つてある。その上部に、大きな字で「汝等厚生の家」と、道に向けてさう書いてある。

その家の奥に、いづれも手製の哀れなルンペン小屋が、寒い川岸に沿つて、びつしりと並んでゐた。ほんの橋ひとつ隔てた反対側の川岸には、「蜂龍」「田川」「金田中」といつた一流どこの豪奢な建物が並んでゐる。

三

「沖津君は、お濱離宮に行つたことがあるかい？」

無いと、私が答へると、

「傍に来てゐながら……」

と玉置は笑つて、

「俺は、一度、入つたことがあるが、アベックだらけで驚いた」

「語るに落ちた。君もアベックだつたのだらう」

玉置は腕時計を覗いて、

「ひとつ、會はせるかな」

「さつきは、女がだませないなどと言つて、ちゃんと、だま

してゐるぢやないか」

「だましてたら、お濱離宮など歩いてやしない」

「だまし申か。それにしても、お濱離宮とは、また」

「行かう行かうと言ふもんだから」

「若い子だな」

玉置は、それに答へず、

「アベックの多いのを見て、俺はつくづく思つた。若い男女のための戀愛の場所が、これで見ると、實にないんだ……」

「それは、いつか、僕も若い獨身の男に言はれたことがある」

若い戀人同士で行くところと言へば、喫茶店かダンス・ホール、または映畫館かにきまつてゐるが、靜かな語らひの場所として適當でない上に、その金も、まだそんなにサラリーを取れない若い身には、かなりの負擔になる。中年の男の方にばかり、やれ藝者だ、待合だ、バーだと享樂の設備が至れりつくせりなのは不都合だと、その若い男は言つた。

「さう言はれれば、その通りだが、われわれ中年男には、享樂はできて、若い人のやうな戀愛はできない」

玉置は、しんみりとした語調で、

「俺は、しかし、許されないことかもしれないが、戀愛がしたい。今のままでは、寂しくて、たまらない」

いかにも寂しさうなその言葉は、玉置と同じやうな氣持の

私の胸に、じーんと沁みた。だますのどのといった、えげつない言葉の奥に、實は戀愛への憧れが秘められてゐるのだ。それぞれ妻がある身の戀愛は、その終末が、結局は相手の女をだましたといふことになるんだと分つてゐるので、さうした言葉を使つてゐたのだ。

私たちは寂しく黙りこんだ。私たちの歩いてゐる道も寂しいのだつた。——橋を渡ると、右は海上保安廳水路部の石堀、左は進駐軍に接收された舊海軍病院のこれも長い堀であつて、その二つに挟まれて急に寂しい道に成り、その道の突き當りの市場も、朝ならごつた返しの賑やかさなのだが、今は全く人影が無い。

私たちは舊海軍病院の方へ曲つて行つた。堀の上に嚴重な鐵網を張りめぐらしたそこには、棍棒を持つたガードが、制服の肩を怒らせてゐて、通行人の私たちを胡散臭さうにねめつけた。人の雜沓してゐる銀座からさほど離れてゐないそこなのに、通行人といふものは一人もなかつた。堀のなかに用のある外國人たちは、いづれも自動車で來るのである。

「後腐れのない戀愛——これができたら、いいんだが」

と私が言ふと、玉置は、私も知つてゐる友人の名を言つて、

「あのドンファンに、この間、祕訣を聞いてみた」
その男は次々にあらゆる種類の女を手に入れてゐた。玄人もあれば素人もあり、半玄人といふか半素人といふか、さう

いつた女にも及んでゐる。

「秘訣は彼によれば、極めて簡単だと言ふ。つまり、女を捨てるのでなく、女の方から自分を捨てさせるやうにすれば、いい……」

「自分が逃げるのでなく、向うに逃げさせる？　うまい手だが、逃げさせるには、しかし、どうしたら……」

「女に、愛想をつかさされるやうにすればいいんだと、彼は言ふ」

「彼ならできるが」

「俺もさう言つたところが、できないのは、虚榮心があるからだと……」

「虚榮心か。でも、自分を、さう、みつともなくもできないしね。第一、それほどまでして、女を次々に手に入れることも無い」

「——無いと言へば、無いが、彼によれば、そのくらゐの覺悟がなかつたら、女に手を出すと言ふんだ」

「女に手を出す以上は、ひとりでも、次々でも、同じだといふことか」

「別れたあと、女の氣持を惨めにしないことが、大事だと彼は言ふのだが、たしかに一理はある。男から捨てられたと、惨めな氣持にさせないで、自分の方から男を捨てたのだといつた誇りを、女に持たせなくては、いけないといふんだな」

「それは分る。僕が、今、それほどまでしてと言つたのは、自分から醜體を見せたくないといつた氣持ではない。女を捨てるといふことだつて、醜體と言へば醜體だ、捨てる方が、女から捨てられるのより、醜體でないかどうかは、分らない。僕が考へてゐるのは、捨てた、捨てられたといつた、いざこざの無い別れ方ができないものか……」

「別れることを、君は真先に考へて、女と戀愛をしようといふ……」

「君だつて、さうぢやないのか」

私が言ふと、玉置は——それはさうだがと言ふと思つた玉置が、

「それだつたら、商賣女との浮氣が、一番いいんだが、しかし、それも、あぢけない」

「うん」

「やがては別れるのだときめてかかつて、戀愛するのも、あぢけない」

これは、抽象論でなく、具體的に女の姿が玉置の腦裡に描かれてゐるやうだつた。

「別れない戀愛をしようといふのか。戀愛をした以上は、細君を離別してでも……」

「それは、ちよつと」

と玉置は直ぐ、さう言つて、

「女房を今更……それは、ちよつと、できないね」

四

料亭「新喜樂」の前に來てゐた。いきな塀が、「とんぼ」へとつづいて、別天地のやうな静けさだ。

道をへだてた向ひ側は、魚市場に附屬した、通常「場外」といふごみごみした商店街である。魚のいろいろな加工品に、經木や折箱といった魚屋用のものを賣つてゐるこの一區劃は、朝が早いのもう店をしまひかけてゐる。濡れ手拭ひを手にした錢湯歸りの男衆も、ちらほら見かけるから、既に店を閉ぢたのもある譯だ。

早朝の開店故、夕方といふとどこも戸をしめて、しーんとなるのだが、その頃になると、逆に灯の色もいきいきと反對側の料亭が活氣を帯びてくる。美しく着飾つた藝妓たちが人力車を次々と乗りつける。客も自動車で續々とやつてくる。

やがて絃歌のさざめきが聞え出す時は、道の向う側は深更のやうに寢靜まつてゐる。料亭はその時刻がもつとも賑やかで、なまめいた光りが鋪道にまで溢れてゐる門前には、晝間は見かけない高級自動車が、ずらりと並んで主人の歸りを待つてゐる。その車に、女中に送られて入る客の眼には、たとへ酔眼でなくても、向ひ側のごみごみした風景は、夜の闇

に黒く包まれてゐて、何ひとつ見えないのである。

私も、たまには何かのおよばれでこの料亭に來るのだが、歸り際に見る向ひ側は、その朝方の賑はひ、といふよりんやわんやの騒ぎの、とんと想像できない黒一色であるのが常である。今はしかし、道の兩側とも見える、そのコントラストを面白く見ながら私は、玉置に言つた。

「後腐れのない戀愛は、さうなると結局、プラトニック以外にはないといふことになるだらうか」

「俺も、結局、それで行くよりしやうがないとも思ふが、しかし……」

「それで通せるかどうか」

「自信がないね」

「それに、相手の方で、そんなのは戀愛ぢやないと思つたら、これは、戀愛にならんし……」

「さうなんだ」と玉置は變に力んだ。

西本願寺の尖塔が、向ひの右手に見える四つ辻に、私たちは出た。左へ行けば銀座で、逆は勝鬨橋である。私たちは銀座の方へと曲つたが、勝鬨橋の方へ行くと、その勝鬨橋の手の門跡橋もんせきばしの際に、昔、所謂河岸のてんぷら屋のひとつの「拵新きんしん」といふのがあつた。その邊は焼け残つたから、今でもその店はあることはあるのだが、てんぷら屋はやつてない。そこへ私は、今は死んでしまつた友人とよく夕食をとりに行